朝鮮語における複合音節末の子音削除と共鳴音の出没について

桑本裕二

秋田工業高等専門学校

頭子音・音節末のいずれかにおいて、子音連続が避けられる現象は様々な言語に存在するが、そのあり方には、子音が削除され単子音になる場合と、母音挿入によって新しい音節が形成される場合がある。借用語音韻論においては、子音削除よりも母音挿入の方が優勢であるといわれているが、借用語に限った場合の頭子音連続（onset cluster）の回避に関しては、Yip (1993), Paradis & LaCharite (1997) などとそれらを総括して考察を行った高野 (forthcoming) の研究がある。本研究はこれを受けて、音節末の子音連続（coda cluster）の回避について、特に子音削除を行う朝鮮語のデータで検討する。加えてその際にかかわる鼻音、側面音などの共鳴音のあり方について考える。

朝鮮語は、頭子音にも音節末にも子音連続を許さない。しかし、複合音節末に、母音で始まる音節が後続する場合、複合音節末の後部要素が後続音節の頭子音として出現することがある。このことから、基底では音節末に子音連続を考えなければならないことになる。この音節末の子音連続は、音節が後続しないか、子音で始まる音節が後続する場合には、２つの子音のうち、どちらかが削除されることになる。その様子は、次に示すようになる。

-(l)k	-k(s)	-n(h)	-n(tʃ)
-(l)m	-p(s)		
-(l)p			
-(l)p^h	-l(s)	-l(h)	-l(t^h)

第１列は音節の端が保たれる場合、その他は音節の端の要素が削除される場合である。数の上からも 4:7 でどちらかにより偏っているということもなく、ソノリティーやその他の要因で削除が決定されているとは考えがたい。また、第１列はいずれも側面音 /l/ が削除される場合で、側面音が落ちやすい、という可能性も、第４行に並ぶ、/l/ が落ちない例と、その比率（/l/ の削除 : /l/ の保持 = 4:3）も拮抗しており、ここに何らかの傾向を見いだすことも難しい。平野 (1995, 1996) は Feature Geometry 理論を用い、素性構造の単純さが分節音削除を誘発するという傾向を提案したが（Parse-Place, Parse-SV などの制約を提示）、本研究では、平野の一連の分節音削除現象の研究をふまえ、さらに明晰な説明を、この音節末子音削除現象に対して与えることができることを示す。

具体的な方策としては、音節末の単子音の出現制約（朝鮮語には /s/, /h/ は音節末にな出現しない。また、破擦音 /tʃ/, 激音（有気音） /p^h, t^h, k^h/, 濃音（強勢音、または咽頭化音） /p’, t’, k’, s’/ などの同時調音や二次調音を伴うものも同じく出現しない。）と、ソノリティーの低いものほど音

節の端にふさわしいという普遍的な原則に基づく制約などにより、より単純化された説明が可能であることを導く（もちろん、上記例中、-(l)pʰ のような、激音が保持され、そのあとに平音化すると考えざるを得ない例も存在する）。

さらに、子音の中でもソノリティーが高い共鳴音に属する側面音 /l/ と鼻音 /m, n/ に限ってみた場合、鼻音は必ず保持されるが側面音は上記の通り出没が一定しない。ここに見る２種類の共鳴音のふるまいの違いは、両者が音節境界で接したときに見せる特異性に帰することができる。鼻音の頭子音は、先行する音節末の /-p, -t, -k/ を逆行同化し鼻音化する一方（-p.n-, -t.n-, -k.n- → -m.n-, -n.n-, -ŋ.n-）鼻音 /-m, -ŋ/ が先行する頭子音 /l-/ はこれらに順行同化し、/-m.n-, -ŋ.n-/ となる。また、/-n/ が先行する場合には、/-l.l-/ となるが、この側面音化の同化現象は調音点が一致することが唯一の引き金になっていると考えられる。この音節境界における鼻音化現象は、それよりもソノリティーの小さい阻害音も、ソノリティーの大きい側面音も同化させている点で、音節の端の要素はソノリティーのより小さいものがふさわしいとする原則にかかわらないものであり、上述の子音削除において鼻音の削除例がないこととも関連し、鼻音の音節末子音としての優位性を示している。また、側面音は /-n.l-/ → /-l.l-/ の場合という限られた場合のみ音節境界に優先されるという特異性も、共鳴音ではありながら鼻音とは異なる性質を持つことによって複雑なふるまいをしていると結論づけることができる。

参考文献

平野日出征 (1995)「素性構造の複雑性と子音の削除―朝鮮語を主として―」『東北大学言語学論集』第４号，157-177.

平野日出征 (1996)「最適性理論と分節音削除現象」『東北大学言語学論集』第５号，1-17.

Paradis, Carole & Darlene LaCharité (1997) “Preservation and minimality in loanword adaptation,” *Journal of Linguistics* 33, 379-430.

高野京子 (forthcoming)「借用語適応における複合頭子音の子音削除をめぐって –Perceptual saliency vs. Threshold principle-」西原哲雄・田中伸一・豊島康二編『現代音韻論の論点』晃学出版，14p.

Yip, Moira (1993) “Cantonese loanword phonology and Optimality Theory,” *Journal of East Asian Linguistics* 2, 261-291.